

昭和60年度夏期林業統計研究会の報告

会場設営係一同

本年は春の総会で決まりましたように若手研究者の日頃の研究成果を発表していただく場として、7月24日から3日間、名大稲武演習村で夏期セミナー開催しました。

大友、近藤両大先輩をはじめ、特別参加の古橋稲武町長、名大演習林教職員を含めた総勢47名（内家族8名）が参加する中、講演、研究発表、見学ともに沢山な行事に、活発な論議があり、忙しい3日間でした。その合間をぬって楽しんだ懇親会、家族見学会には名大演習村教職員の方々の協力、町長、林長のさし入れ、また参加の方々からも多大なカンパ、おみやげ等があったことを報告し、感謝のことばといたします。

研究発表（別記）に先立って、当地の林業行政の指導者である古橋茂人稲武町長に「古橋林業」と題して講演をお願いしました。

名大演習村のある稲武町（面積約1万町歩）は、愛知県北東部に位置し、その本格的な林業の歴史は、天保（1830）年代に遡ります。その模範となり、指導にあたったのが、古橋林業であり、古橋家代々の家長であります。古橋町長のお話は、そのまま講談を開くようではありますが、天保の飢饉による村民の窮乏を目のあたりにした三河杏橋家六代目の源六輝兒氏は、古橋家を村民との共存共栄を旗印として村民に植林を奨励し、この地方の飢饉・災害の防備、さらに経済・文化の向上を計ったのであります。その精神は代々の古橋家と村民に受継がれ、いわゆる百年植林計画など特異な林業を推し進めるなど、今日の稲武町繁栄の基盤となっています。

林業労働力不足の現在、古橋町長が薦められる林業は、高伐期複層材からの大径木優良材生産を目的とする非皆伐林業であります。

これは名大演習村北原宣幸文部教官との共同研究のもとに進められており、昭和45年頃より実行されている数ヶ所の試験地には各地からの見学者も多いとのことで。本セミナーでも講演のあと現地を見学し、直接当事者との論議をかわすことによって「5町歩非皆伐林業」についての理解を深めることができました。

古橋町長のもう一つの論点は「山は、たとえ材価が低くても計画通り伐採し、値段が高くなるまで木材として蓄えておくべきである。」ということです。これも林業を少し長い眼でみれば、重要なことではないでしょうか。

最終日は、木曾ヒノキ林見学ということでマイクロバス、自家用車を連ねて、付知へ出かけ、山下経営課長さんほかの案内で、付知営村署管内の神宮備林とつい先頃伐採されたご神木の伐根を見学しました。みごとな木曾ヒノキに夫々の感慨をもたれたことと思います。

予定よりやや遅れましたが、26日午後4時半、無事名古屋駅で散開しました。

お世話になりました古橋町長、付知営村署、名大演習林の方々にあらためてお礼申し上げます。

また研究発表者をはじめご参加下さった皆様には、時間的に場所的に窮屈な思いさせたことを申し分なくと思いますが、暑いところご苦労様でした。

なお、セミナーは下記日程のもとで行われました。

- (1) 期 日 昭和60年7月24日（水）～26日（金）
- (2) 場 所 名古屋大学稲武演習林
愛知県北設楽郡稲武町大字稲橋字大井平道下
- (3) テーマ 「古橋林業」
「生長論とその周辺」
「神宮備林見学」
- (4) 日 程 7月24日（水） 現地集合（18：00）まで
夜 小コンパ
7月25日（木） AM. 9：15～ 講演「古橋林業の歴史」
稲武町長 古橋茂氏
ヒノキ天然更新試験地見学
PM. シンポジウム「生長論とその周辺」
夜 懇親会
7月26日（金） 出小路神宮備林 見学
8：00 演習林出発
17：00 名古屋駅にて解散
- (5) シンポジウム演題，講師
「直径分散の増大と拡散モデル」 田中和博 （東京大学）
「北方天然林の現状と林相改良」 野堀喜裕 （北海道大学）
「生長方程式と生長曲線式の分類」 吉本 敦 （名古屋大学）
「リチャード生長関数にもとづく同齡単純林の
胸断面積合計と平均胸高断面の生長モデル」 伊藤達夫 （京都府立大学）
「広葉樹資源量の推定について（Ⅱ）
——ローレンツ曲線による広葉樹林分構造の表現——」 松本光朗 （国立林試）
「同齡単純林における新しい蓄積推定法」 森田栄一 （林試九州支場）

※ 出小路神宮備林の概要

面 積 : 700 ha
蓄 積 : 31万 m³ (460m³/ha)
樹 齢 : 200～400年 (平均320年)
樹 高 : 20～30m (平均 23m)

胸高直径 : 40-140cm (平均 64cm)

出小路神宮備林は名古屋営林局付知営林署管内にあり、長野上松営林署の赤沢ヒノキ林とともに木曾ヒノキの美林として知られ、最近ではヘリ集材などで1本(10㎡)が1,000万円前後のヒノキが出材されている。



名古屋大学演習林

1 沿革

昭和26年名古屋大学の農学部に林学科が設けられ、これに伴い林学の教育・研究のために、演習林の設定が計画された。

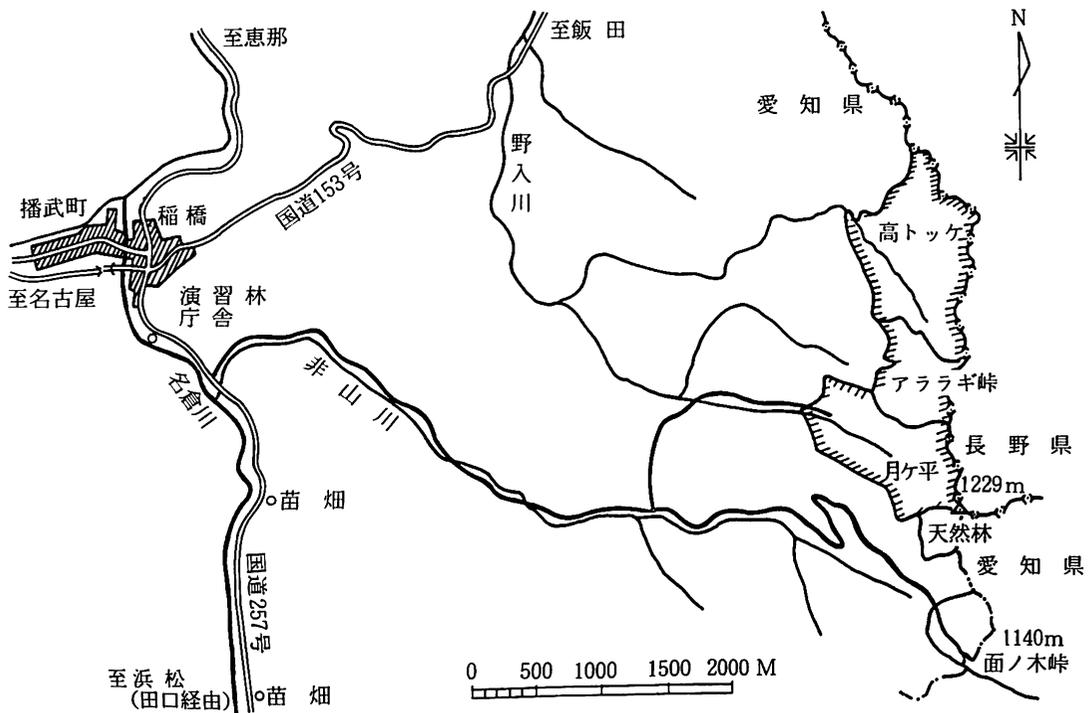
本学演習林は、愛知県北設楽郡稲武町所在の野入区および稲橋区の部落有林（管理者稲武町長）を分収契約により設定したものである。正式契約は昭和30年7月8日に名古屋大学長勝沼精蔵と稲武町長大石文一との間に結ばれ、その内容は60ヶ年間の地上権設定契約である。その後、昭和46年6月および同47年9月に林地の契約が若干変更され、現在演習林の台帳面積は、1,438,709㎡で実面積は約201haとなっている。

2 位置

本演習林は英知県北設楽郡稲武町にある。庁舎は国道153号線と257号線との交叉点にほど近い稲武町の中心部にあり、大学から約70kmの距離にある。

演習林としての林地は長野県との県境に接し、庁舎から約10kmの距離にある。なお稲武町大字中当に2ヶ所の苗畑（面積0.6ha）がある。

名古屋大学農学部附属演習林位置図



3 地 勢

演習林は南北に2.9km、東西に平均約0.7kmの広がりを持ち、その東側は尾根界で長野県に接している。この地域は矢作川水系に属する根羽川の支流にあたる野入川の源流地である。

標高は920mから1,230mの間にあり、演習林面積の約半分を占める南・中部の月ヶ平・アララギ峠地区は傾斜が急である。これに対して、北部の高トッケ地区の傾斜は暖かで、準平原的な地形をなしている。また、高トッケ地区の沢には平坦地が多い。

4 地質・土壌

この地は木曾山脈の南にあたり、ここの基岩は、大部分が先新生代の角閃黒雲母花崗岩よりなる。また、南東角の最も標高の高い所に、若干、新第3紀の両輝石安山岩の露出をみる。

土壌型については、南中部の月ヶ平・アララギ峠地区はほとんどB_h型、B_{h(c)}型でしめられており、沢すじにはB_h型がみられる。またその一部に若干G型がみられる。これに較べて、北部の高トッケ地区は、G型の分布がより多く、尾根部に若干B_c型がみられる。B_I型土壌も東南部角の基岩が安山岩の地域などに少しみられる。また高トッケ地区は月ヶ平・アララギ峠地区よりも土壌層が薄く、地位の低いことが知られている。

5 気 候

標高520mの稲橋での観測値より演習林の年平均気温を推定すると7.6℃～9.5℃の範囲にあり、その平均は8.5℃となる。

年降水量は、稲橋で2,100mm程度であるが、演習林のそれは2,500mmくらいと推定されている。当地方は降雪少なく、稲橋観測所における最近30年間の平均年降雪量は約30cm程度である。

6 林 況

この林地は演習林となる以前には、沢ぞい、その他の肥沃な林地だけに造林が行われ、他は薪炭林として取り扱われて来た。演習林となってから、主として針葉樹の造林による林種転換が行われ、27年の年月をへた。現在では、林地の9割が造林され、天然生林は尾根沿いなどに若干残るのみとなった。樹種別の造林面積はカラマツが一番多く、全体の36%をしめ、次いでヒノキ・スギが多くそれぞれ全体の30%に近く、アカマツは10%にみえない。スギは地味のよい所に、カラマツは寒害のためスギ・ヒノキが育ちにくい所に植えられている。

なお演習林に隣接して井山の天然林がある。これは稲武町の区有林で、温帯の中部に位置し、ブナ・カエデ属・シデ属の各種、ミズナラを主体とする落葉広葉樹林で、イヌブナ・センノキ・シズメなどもみられる。またモミ・ツガ・カワラ等の針葉樹が混じっている。亜高木は、アブラチャン・タンナサワフタギ・シロモジなどが多い。

7 試験研究

主要な試験研究は次の通りである。(1)稲武演習林の植生分布に関する研究 (2)稲武演習林の土壌に関する研究 (3)ヒノキ林の物質生産に関する研究 (4)カラマツ林の自然間引の機構に関する研究 (5)林木および苗木の寒害に関する研究 (6)非皆伐施業における稚樹の保育に関する研究 (7)森林水文学に関する研究, とくに山地の水源かん養機能に関する研究